

8月の乾いた砂

永瀬 悟

8月の乾いた砂なんていう題名を見ただけで心が浮きたった人には悪いんだけど、これはポルノでも煽情小説でもなんでもないんだなあ。サイクリング部に3年半前にはいってから頭の中に最も強烈に焼きついているのが、この8月の砂なんだから。別に月や季節が変わったからといって砂自体が変わる記憶もない。砂は砂であって、せいぜい雨に濡れているか、乾いているかの違いだけ。思い出しに残っているのは湿り気のない砂で、それをたまたま8月に見たものだから題がこうなったわけ。

道を自転車で走っていると(自動車をころがしている時には絶対にわがらなない)時々光の加減で、きらきらと輝いている砂を見かける時がある。自転車の轍やら風に追いやられて、ある特定の場所に砂が集まっています。そこだけは他のアスファルトの部分とは全く異なるた奮闘気をかもしだしていたりする。真夏のさんさんと降りそそぐ陽の光をわびている時、さんが最高なんだなあ。ただその最高さが、その時はかりは180度ばかり向きを変えていて、今までの裏日にしただけ。話は、去年の夏、東北合宿の半ば頃のある日、普段は最後尾の監視役ばかりやっていたのが、何を血迷ったのか、先頭の方を走って坂道を下っていた時のこと。たまに

前に出ると単純に嬉しくな。て、速く走りたくなるもの。スピードを少しばかり出して下りの急カーブで、まらぬ砂に足とれて、砂の上で左手をほんのわずかがり何気なく握りしめただけ。オバさん、曲がれるかなあ、なんて思いつから。いまだに取つかしくて一踏にいた人間に聞けないのは次に自分が目をあけるまでに、どの位の時がすぎたかという事。本人は数秒であらうと信じているのだけど。とに角気がついて、いの一番に、気がついたのは、乗っていた自転車。こう書くと、えらく立派に見えるけど、本心はそんなもんじゃなく、自転車士え、こわれていけば、もう乗らんで、ビッパイクでもして、不貞腐れて帰るのを

期待していたんで。人間様に比べて、オバさんどうってことのない自転車を、まのあたりに見た時の気持ち。わがてもらえないだろうなわ。そんなもって仕方なしに、最寄の駅へ、たらたらと向かっていると、キリストさまのお墓なんていう素敵も、のがあって、ここでも奇蹟かなんかが、三つはあ、と起きて、体か回復すれば、めでたし、めでたしで、一件落着存のに。あるわけがないんだよなあ、そんなこと。なおせるのは、ヤブでもなんでも、近代医学であって、自転車屋なんだよ。今じゃ、笑い話なんです。あの時は、何十回も死んだよ、うな気になっただけど。